

事業名：命の大切さを考える防災教育公開事業（学校安全総合支援事業）
 モデル地域：茂原市立富士見中学校区 拠点校：茂原市立西小学校

所轄教育委員会：茂原市教育委員会

1 モデル地域の現状及び安全上の課題

（１）モデル地域の現状

○モデル地域名：茂原市立富士見中学校区
 ○学校数：小学校３校 中学校１校
 高等学校１校

（２）モデル地域の安全上の課題

茂原市の地下に活断層は確認されていないが地盤が緩い。この先 30 年以内に震度 5 強以上の地震が発生する可能性は 99% 以上と予測されている。しかし、地震に対して通常の避難訓練は行っているが、能登半島地震のような地震被害に対応できるような対策はほとんどできていない。

児童生徒がいつどのような場所にいるときに大地震に遭っても、自らの命を確実に守れるように、地震に対する避難の基礎知識について改めて学んだり、体験したりして、いざというときに使える力を養う防災教育の充実が喫緊の課題である。

2 モデル地域の事業目標

- ・拠点校を中心に、地域と連携した防災教育を行い、児童生徒が防災意識を高めたり、「共助」について考えを深めたりするための防災教育の充実を図る。
- ・学校・家庭・地域及び関係機関の連携を図り、安全・安心で信頼される学校づくりを推進する。
- ・拠点校の取組をモデル地域内に広め、各学校において持続可能な防災教育体制や危機管理体制を構築する。

3 取組の概要

実施時期	実施事項	参加者
5 月	○第 1 回教職員研修	市防災対策課 ・拠点校職員
6 月	○第 2 回教職員研修 ○防災意識調査① ○第 1 回推進委員会への参加	実践委員・ 拠点校職員 市教委・ 拠点校職員
7 月	○第 1 回実践委員会 ○第 3 回教職員研修	実践委員 中核教員
8 月	○第 4 回教職員研修	実践委員
9 月	○防災教育出前授業 （４～６年）	拠点校児童 ・職員・災害対策コーディネーター
10 月	○第 2 回実践委員会 ○防災フェスティバル・起震車体験・引き渡し訓練 （水害）	実践委員 拠点校児童・ 職員・保護者・地域ボランティア
11 月	○防災教育公開授業 ・講演会	拠点校児童 ・職員・実践委員・公立学校教職員・保護者
12 月	○防災意識調査② ○第 3 回実践委員会	実践委員
2 月	○第 2 回推進委員会への参加	市教委・拠点校教頭

4 具体的な取組

(1) 安全教育の充実に関する取組

ア 安全教育の充実に関する取組

(7) 実践委員会における情報共有

7月、10月、12月に実践委員会を開催した。実践委員会で情報交換の時間を設け、各学校の実践や拠点校の取組等について共有を図った。

＜実践委員＞

千葉科学大学教授、東上総教育事務所指導主事、茂原市教育委員会主幹、茂原市防災対策課副主幹、千葉県災害対策コーディネーター茂原会長、鷲巣地区自主防災会会長、拠点校校長・教頭・教諭・PTA会長、モデル地域内の各学校の校長・教諭

(イ) 防災教育公開授業の開催

拠点校を会場に防災教育公開授業を実施した。

日時：令和6年11月22日

テーマ：自分の力で自らの命を守れる子供の育成～家庭・地域とが連携した持続可能な防災教育を目指して～

内容：全学年が取り組んだ防災に関する授業から、学んだことや気付いたこと等の成果や課題を発表し、全校児童、地域、保護者、参加者で学びを共有した。(別添1)

参加者：学校安全アドバイザー(千葉科学大学教授)、千葉県教育委員会、実践委員、西小学校教職員、保護者、県内公立学校教職員

参加人数：271名



(ウ) 講演会の開催

学校安全アドバイザーによる講演会を実施した。

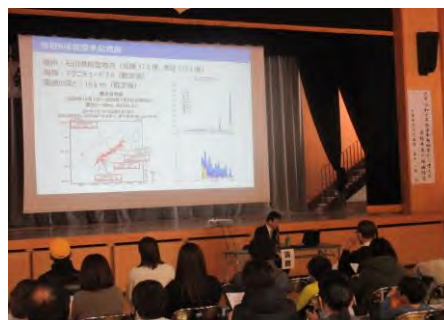
日時：令和6年11月22日

テーマ：令和6年能登半島地震から考える房総半島の地域防災

内容：能登半島地震で検証された結果や課題を基に、能登半島と共通点の多い房総半島において学んでおくべきポイントを紹介いただいた。また、茂原地域で起きた過去の水害や災害から備えるべき対策について分かりやすく解説していただいた。

参加者：防災教育公開授業と同様

参加人数：102名



(エ) 研修会の開催

モデル地域内の学校の教職員を対象に拠点校の学校安全に関する研修を実施した。

a 日時：令和6年5月20日

講師：茂原市防災対策課

近藤 恒史 氏

内容：茂原市の自然災害の現状や危険箇所、防災体制等の課題について研修会を行った。
なお、実践委員には後日資料を配付した。

参加者：拠点校教職員（実践委員）

参加人数：20名（資料配付14名）



(オ) 災害時引き渡し訓練の開催

拠点校を会場に地域ボランティアが参加する防災訓練を実施した。

日時：令和6年10月11日

内容：水害が迫り、帰宅困難な状況になることを想定した引き渡し訓練を行った。下校時には、通学路が浸水した場合を想定し、親子で通学路点検を行った。

参加者：拠点校児童、保護者、PTA、交通ボランティア

参加人数：約360人



(カ) 学校安全アドバイザーの活用

千葉科学大学 危機管理学部

藤本 一雄 教授

派遣校数 1校、派遣回数 6回

b 日時：令和6年8月26日

講師：千葉科学大学危機管理学部

教授 藤本 一雄 氏

テーマ：子供たちを「防災管理ができる大人」に育てるための防災教育

内容：防災管理におけるリスクマネジメント、危機管理、防災教育について解説をいただいた。また、弱点発見イメージトレーニングのワークショップを行い、参加者の地域における弱点を把握する下地づくりとした。

参加者：拠点校教職員・実践委員

参加人数：34名

イ 安全教育の取組の評価・検証について

(7) 防災意識調査の実施

モデル地域内全ての学校の児童生徒を対象に、拠点校で作成した調査様式を用いて6月と12月に防災意識調査を実施した。保護者については小学校、中学校保護者を対象に調査を実施した。また、実践委員会において学校安全アドバイザーの千葉科学大学藤本教授より次年度に向けての助言をいただいた。

(4) 茂原市の成果指標

- a 危機管理マニュアルの見直しや内容の周知などを行い、日頃の安全教育・管理や危機発生時における各教職員の役割について、共通理解を図っている学校の割合は、事業実施前後ともに100%であった。
- b 学校安全に関する校内会議や研修等を実施している学校の割合は、事業実施前と比較して2校増加し、80%となった。
- c 学校安全を推進するための中核となる教員（管理職以外）を、校務分掌に位置付けている学校の割合は、事業実施前後ともに100%であった。
- d 予告なしの避難訓練（ワンポイント避難訓練も含む）を実施している学校の割合は、事業実施前と比較して1校増加し、60%となった。

(5) 拠点校におけるアンケート結果

本年度事業の実施前後の防災に関する児童の意識の変容（別添2）

事業実施前後における児童の意識の変容を調査した。「家庭内における

備蓄品の有無」、「家庭内における耐震対策」の項目で肯定的な回答の割合が上昇し、「分からない」と回答する割合が減少した。また、「家庭内における災害に関する話し合いの有無」や「家庭内の災害時の取り決めの有無」の項目で肯定的な回答の割合が上昇した。

(2) 組織的取組による安全管理の充実に関する取組

ア 防災フェスティバルの開催

令和6年10月10日にPTA役員、地域の防災会、消防団、災害対策コーディネーターと学校で連携し、児童が楽しみながら防災に関する知識に触れたり、体験をしたりできる防災フェスティバルを開催した。児童だけでなく、運営する地域の方々の防災意識も高める機会となった。



イ 起震車体験

令和6年10月10日に千葉県防災危機管理部危機管理政策課、茂原市防災対策課と連携し、起震車による震度7の揺れを全校児童が体験した。参加希望の保護者も体験し、地震の怖さを理解することで、日常生活で

の備えを親子で見直すきっかけになった。



(3) 学校安全の中核となる教員の学校安全推進体制の構築における役割及び中核教員の資質能力の向上に係る取組について

ア 第2回教職員研修会

日時：令和6年6月24日

講師：東上総教育事務所

指導主事 井下田 靖之 氏

内容：「災害安全に関する先進的な実践校の取組」の解説を通して、どのような取組が効果的か、日頃の協働的な学びの場面をどのように防災教育に取り入れていくとよいか講話していただいた。

参加者：拠点校教職員、中核教員



イ 第3回教職員研修会

日時：令和6年7月19日

テーマ：児童生徒自身に判断させる訓練の在り方

内容：各校の学校安全計画及び安全指導年間計画を持ち寄って情報交換を行い、より効果的な防災教育、避難訓練等について検討した。藤本教授から指導いただいた以下の点を、各校の今後の防災教育、避難訓練に生かすよう共有した。

- ・訓練では、覚えるだけでなく、どうするか考える時間も必要である。訓練時に子供が考える取組や訓練後の振り返りを行うとよい。
- ・学校で推進するべきは「安全教育」（何が危険であるか、どのように自他の生命を守るかを知る）であり、児童生徒に「失敗しながら身に付けていく」視点を持たせることが大切である。
- ・訓練は想定を明確にし、児童に何のための訓練か、意識させることが大切である。それぞれの地域や土地のリスクを知るためにハザードマップ等を確認し、弱点を洗い出したり、把握したりする必要がある。

講師：千葉科学大学危機管理学部
教授 藤本 一雄 氏

参加者：拠点校職員、中核教員

5 取組の成果と課題

【成果】

- ・拠点校においては、防災について知る時間、体験する時間、考える時間、話し合う時間のそれぞれが、児童の防災意識を高めることにつながった。防災を学ぶ時間の確保、機会の設定による成果であると言える。
- ・災害対策コーディネーターによる出前授業により、児童、教職員ともに、防災に係る最新の知識を得たり、災害時にとるべき行動を知ったりすることができた。
- ・地域との連携を重視した取組により、特に高学年児童は「共助」の大切さを感じ、地域のために自分たちができるところにまで考えを深めるきっかけとなった。
- ・研修会や会議等において、モデル地域内の各校の中核教員等と、今年度行った取組や資料を共有したことで、各校の防災教育を推進することができた。
- ・実践委員会や各取組を通して、児童生徒のための防災教育について協議することで、学校、保護者、地域、行政との共通理解が図られるとともに、連携が強まった。

【課題】

- ・本取組については、今年度から実施し始めたものであり、短期間での取組であったことから、意識調査の数値に肯定的な向上はみられたものの、劇的な変化まではみられなかった。児童生徒、保護者、地域に防災意識を浸透させ、地域全体を真に災害に強い地域とするためには、取組の継続が重要であ

る。今後、取組を継続して行っていくための指導計画の作成や学校支援体制の構築が必要だと考える。

- ・防災教育は学校のみが担うものではなく、家庭、地域が連携して取り組むことが重要になってくる。防災教育について家庭や地域に対する発信、啓発を継続して行う必要がある。

1 授業実践の記録

1年 授業実践「ぼうさいDuck」(11/12)

(目的)

- ・災害とはどんなものかを知り、命を守るための方法を想像する。
- ・ゲームを通して、自然災害が発生した時の「最初の第一歩」を身に付ける。

ぼうさいDuck

安全・安心の「最初の第一歩」を子供たちが、実際に身体を動かし、声を出して遊びながら学ぶためのカードゲーム。

(活動の様子)

西小フェスティバルでは、どんなコーナーがあったか思い出した。災害について考える1日だったことに気付いた。

I C T機器を使用して、知っている災害の名称を付箋に書かせ、全体共有をした。地震や津波、台風などの回答が多かった。地震をきっかけに火事や津波が、台風などをきっかけに洪水が発生することを確認し、理解した。どれも命が危ないことに気付いた。「災害が起きた時、自分の命を守る正しい方法を分かっていますか？」という問いに対して、「全部分かっている」が7名、「分からないものもある」が12名、「ひとつも分からない」が1名という結果だった。

その後、ぼうさいDuckを使用して、自然災害が発生した時の「最初の第一歩」をリズムに合わせて、体を動かしながら学んだ。

学習の最後には、ワークシートを使って、学んだことを振り返り、感想をまとめた。

(児童の感想)

- ・命の守り方が分かった。
- ・津波の時は走って高い所に逃げるのが分かった。
- ・災害が危ないことが分かった。
- ・まだ知らない命の守り方があると分かった。
- ・ゲームで動いて楽しかった。

(成 果)

- ・ゲームの活動を通して学んだことで、学習意欲を高めながら何度もくり返し行うことができ、基本的な防災行動の定着を図れた。

(課 題)

- ・地震や津波、台風等の各災害に対しての基本動作は学ぶことができたが、緊急時は、予測不可能な状況変化が起きるため、状況に応じて行動できるよう、さらに指導していくことが必要である。



2年 防災グッズ作成（11/12）

（目的）

- ・災害発生後の生活の様子を想像し、避難所生活になった場合での課題を明らかにする。
- ・避難所で役立つものを作成し、身近なもので生活をよくすることができることに気付く。

（活動の様子）

始めに、茂原市内で起きた災害と避難所生活の課題について共有し、避難所の生活をよくするためにどんなことができるのかを学習課題として取り組んだ。その後、教師が新聞紙でできたスリッパ、ビニール袋でできたポンチョの実物を見せ、防災グッズの作り方の説明をした。3～5人のグループになり、防災グッズを作成した。大きさや切り方をグループで相談し、よりよいものにしようとしていた。防災グッズを作成した後、スリッパを履いておはじきの上を歩いたり、ポンチョを着て動いたりして、使用感や効果を確認めた。

（児童の感想）

- ・おはじきを踏むとき、靴下よりスリッパの方が痛くなかった。
- ・新聞紙やビニール袋でスリッパやポンチョを作れることに驚いた。
- ・実際にポンチョを着てみたら暖かった。
- ・災害の時に活用したい。
- ・他の物も作ってみたい。

（成 果）

- ・災害後の生活の様子を想像し、避難所生活での課題を明らかにすることができた。
- ・一人一人がスリッパ、ポンチョを作り、身近なもので避難所生活をよりよくすることができると気付いた。

（課 題）

- ・スリッパ、ポンチョの作成に時間がかかった。特にポンチョはあらかじめ切り取り線を記したが、はさみの扱いに手間取っていた。
- ・振り返りの時間を十分にとることができなかった。本時の振り返りをもとに防災意識を高められるような声掛けを続けていく。



3年 授業実践「急な大雨・雷・竜巻から身を守ろう！」(11/12・13)

(目的)

- ・気象防災をテーマに、急な大雨・雷・竜巻等に対する適切な行動の仕方について理解を深める。

(活動の様子)

本実践は、積乱雲による気象災害についての理解を深め、より適切な行動をとれるようにすることを目的として設定したものである。

まず児童には、これまでの「急な大雨」や「雷」の経験を問い、学習課題をつかませた。「竜巻」についての経験はないであろうから、1990年に発生した茂原市竜巻災害の資料を用いた。

次に、気象庁の防災啓発ビデオおよび資料「急な大雨・雷・竜巻から身を守ろう！」を使用し、「気象防災ワークシート」に○×を記入するとともに、ビデオ「これはあぶない！被害編」を見ながら、各自の答えを見直させた。

視聴したビデオをもとに、急な大雨・雷・竜巻それぞれについて、ビデオに登場した子供たちはなぜ危険な目にあってしまったのか、どうすれば災害にあわずにすんだのか、話し合わせた。

翌日、「これなら安全！解説編」のビデオを視聴し、前時に記入した「気象防災ワークシート」の答えの確認を行うとともに、そうすべき理由を確かめていった。そして、急な大雨・雷・竜巻それぞれが起きた時に、どう行動すればよいかをまとめた。

さらに、積乱雲が短時間で発達し接近してくる様子、竜巻(2012年：つくば市)の発生の様子をビデオ視聴し、理解を深めさせた。



(児童の感想)

- ・最初はなめていたけど、あまりそうは思えなくなった。
- ・積乱雲は大きくてきれいな雲だと思っていたけれど、怖くていろいろな災害をつくるものなんだと思った。
- ・大雨・雷・竜巻は、人の命をうばう危険なことだと知った。逃げる場所を間違えたら危険なことを知った。
- ・これから、気象防災について意識する。

(成果)

- ・積乱雲の発達による気象現象が、それまで思っていたよりもはるかに危険であるということを、児童たちが意識することができた。
- ・これらの気象災害に対して、どういう行動をすることが身を守ることにつながるか、児童の理解が深まった。

(課題)

- ・実際の気象現象に対して、今回学習したことを行動として生かせるよう、指導を続けていく必要がある。

4年 授業実践「DIG（災害図上訓練）」（9/25）

（目的）

- ・ 自然災害が発生した時に、危険な場所について考える活動を通して、想像力を養う。
- ・ グループ活動と発表を通して、地域の危険な場所と安全な場所について知る。

（活動の様子）

事前に通学路の危険な所と安全な所を探した。

災害対策コーディネーターの方を講師に招き、災害図上訓練を行った。動画を視聴しながら、どんな場所や状況が危険か共通理解した。その後、「地震」と「水害」の2グループに分かれて、事前に調べた危険な場所についてシールを貼り、その理由を付箋に書き込んでいった。安全な場所は、シールの色を変えて貼っていった。

グループ活動の後には、それぞれの班で作った地図を見せながら、危険な場所と安全な場所について理由を交えて発表した。発表を聞く中で、自分たちのグループでは、出なかった意見を知ることができた。

（児童の感想）

- ・ 危険なところが思ったより多かった。
- ・ 地震や大雨のときに、どのように動けばよいか分かった。
- ・ 自分の通学路の危険な所が知れて、これから気をつけようと思った。
- ・ 災害対策コーディネーターの方のおかげで、危険な所を知ることができた。
- ・ 友達の発表を聞いて、危険な所が分かった。

（成 果）

- ・ 自然災害が起きたときに、どのような場所や状況が危険かを知ることができた。
- ・ グループ活動や発表を通して、地域の安全な場所や危険な場所を深く考えるきっかけになった。

（課 題）

- ・ 各班に災害対策コーディネーターの方に入っていただけだったので、充実した活動となったが、継続してこれだけの人数を確保し、連携していけるかが課題。



5年 授業実践「クロスロードゲーム」(9/26)

(目的)

- ・災害対応について考え、様々な意見や価値観を参加者同士で共有し、視野を広げる。
- ・災害が起こる前から備えたり、考えたりしておくことが重要であることに気付く。

クロスロードゲーム

災害発生時の判断が難しい状況の設問に対して、各自が「Yes」「No」で考え、自分の意見を示す。多数決により獲得できるポイントが異なる。設問に対する正解は示されておらず、なぜそのように考えたのかについて、参加者同士で意見交換する。

ゲームの約束

- ① 自分の考えをはっきり、しっかり伝える。
- ② 友達の意見を最後まで聞く。
- ③ 友達の意見を否定しない。

みんなで楽しく取り組もう！

ゲームのやり方

- ① 問題を見て、「YES」か「NO」を決める。
- ② 理由を、簡単に「集計表」に書く。
- ③ 決めたほうのカードを裏返して机の上に置く。
- ④ 全員で表に返す。
- ⑤ 自分の理由を、みんなに伝える。

※「同じです」は使えない。
※「それは違う」「えー」は言わない。
※理由に対しての質問はOK

分からないことは、先生に聞こう！

① 私は「YES (NO)」を選びました。

② どうしてかという(なぜなら)……

～だからです。(～と思ったからです)。

クロスロードゲーム集計表

YES/NO	理由	結果	ポイント	誰のどの意見について
1 Y・N		1人・多・少	5・1・0	
2 Y・N		1人・多・少	5・1・0	
3 Y・N		1人・多・少	5・1・0	
4 Y・N		1人・多・少	5・1・0	
5 Y・N		1人・多・少	5・1・0	
6 Y・N		1人・多・少	5・1・0	
7 Y・N		1人・多・少	5・1・0	
計				

【資料3 参照】

(活動の様子)

災害対策コーディネーターの方から、クロスロードゲームの進め方について説明を受け、グループごとに、講師の方の支援を受けながら活動を進めていった。モニターに映された設問に対する自分の判断とその理由をワークシートに記入した。それぞれの設問に対し、一生懸命考えていた。



設問例

みんなと登校中に大きな地震が発生。揺れがおさまるとブロック塀や家が壊れている。家族と家が心配。

Yes→家に戻る No→そのまま登校

(児童の感想)

- ・今まで考えたことのない避難の仕方について考えた。友達の意見になるほどと思った。
- ・難しい質問もあって、とても考えさせられた。
- ・災害時、1人かもしれないので自分で考える力が必要だと感じた。
- ・自分の命も他の人の命も大切だと分かった。

(成果)

- ・自分で考えたり、友達の意見を聞いたりしたことで、防災に対する意識が高まった。また、新たな視点に気づき、考えを深めることができた。
- ・これから起こりうる災害を想定し、自分で判断する必要性に気付くことができた。

(課題)

- ・多数派になるとポイントをもらえることから、ポイントをもらうことに意識がいつてしまう場面があった。

6年 授業実践「HUG（避難所運営ゲーム）」（9/27）

（目的）

- ・避難所での仕事を、カードと図面を使って体験することにより以下の3点を理解する。
 - ① 災害が発生すると生活がどうなるか。
 - ② 様々な困難を乗り越えるために、周囲の人との助け合いが重要であること。
 - ③ 障がい者や高齢者など生活に手助けを必要とする人に、どのようなことができるか。

HUG（避難所運営ゲーム）

避難所運営について具体的で実践的に体験できる図上訓練。読み手が、避難所に訪れた人やハプニングについて書かれたカードを読み上げ、児童はそれをもとに避難所のどこに人や物を配置するか考えていく。

（活動の様子）

最初に災害対策コーディネーターの方から HUG の進め方の説明を受けた。その後、グループに分かれてゲームを開始した。はじめは戸惑いながらも、進めていく中で、避難してくる方の状況を配慮しながら配置しようと話し合っていた。

【読み札の例】

- 人物** ・外国籍で○人です。 ・けがをしています。 ・テントで過ごしたいです。
イベント ・明日、仮設トイレが○こ届きます。 ・水が○箱届きます。



（児童の感想）

- ・お年寄りや障がいをもった方、子供連れ、ペット連れの方をどこに配置するか悩んだ。
- ・避難させる側も工夫が必要なことが分かった。
- ・みんなが快適に過ごすためには、配置を考えたり意見を出したりすることが大切。
- ・避難者がどこにいたら過ごしやすくなるのか避難者の気持ちを考えた。

（成 果）

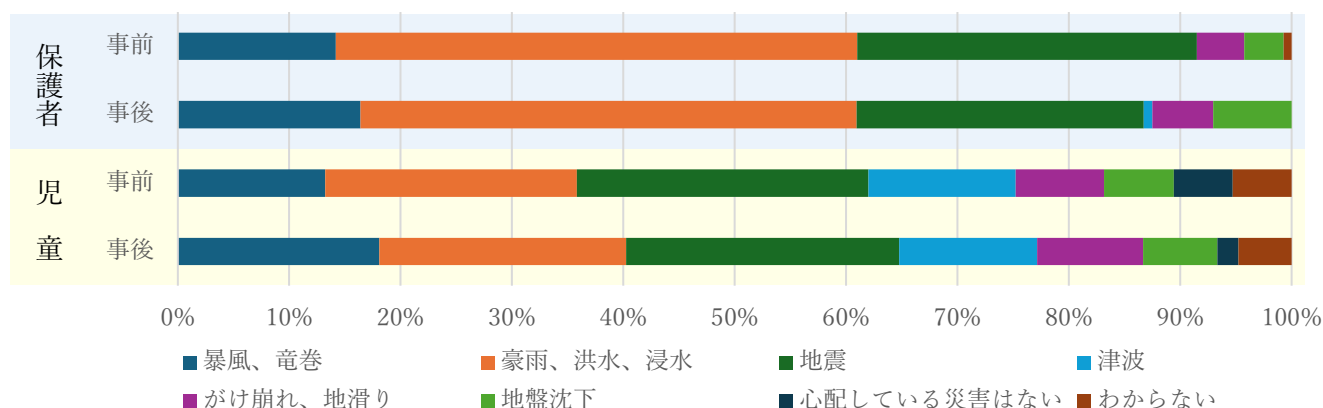
- ・災害が発生すると避難する側も、避難所を運営する側も困難があることを理解した。
- ・互いに気持ちよく過ごすためには周りの人との協力が必要なことに気付くことができた。

（課 題）

- ・図面での体験であったため、イメージすることが難しい部分があった。

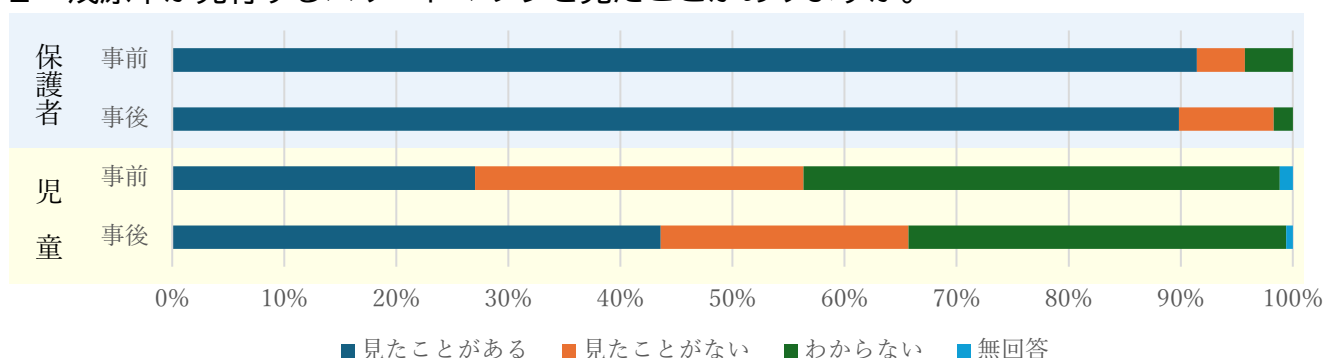
1 7月と12月に実施した災害に関する意識調査の結果と考察

1 あなたの住んでいる地域で、一番心配している災害は何ですか。



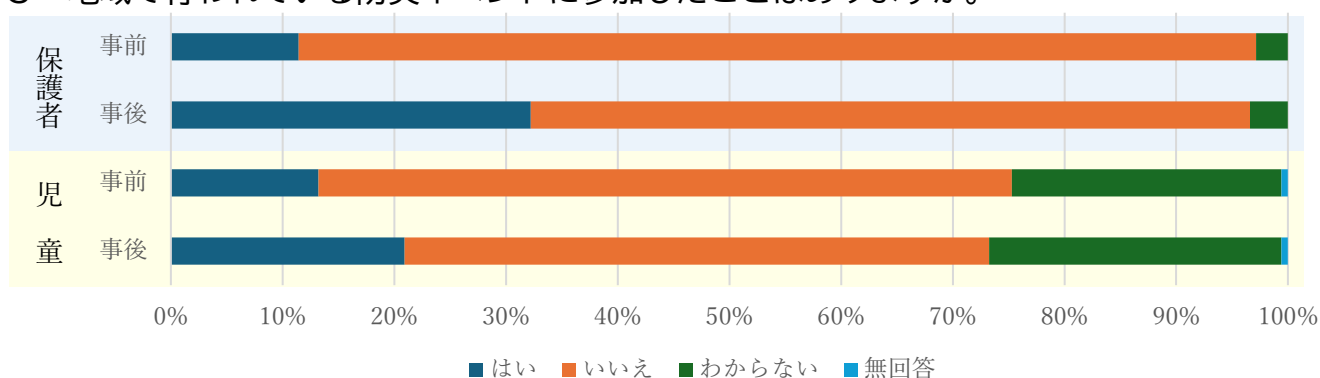
- ・「心配している災害はない」と回答した児童が7月に比べて半分以上に減っており、災害への意識が向上したことが考えられる。

2 茂原市が発行するハザードマップを見たことがありますか。



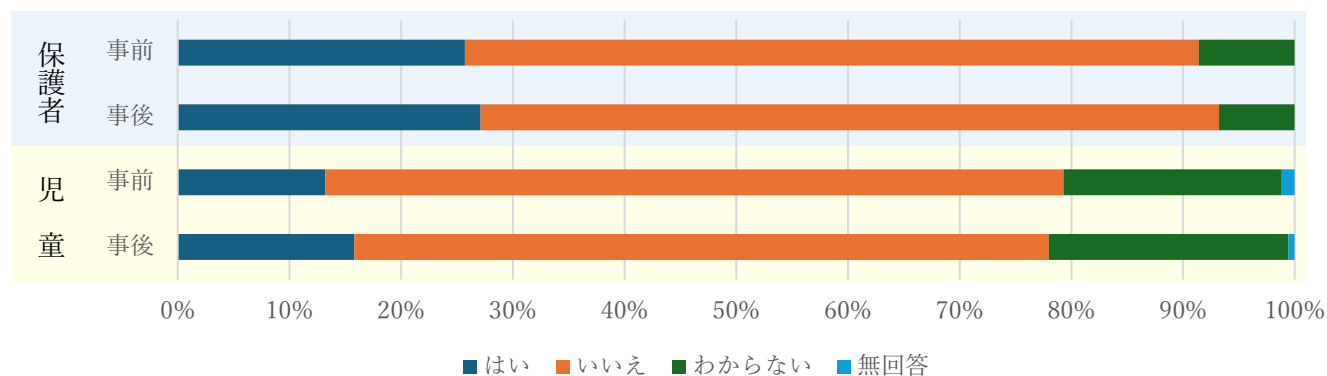
- ・ハザードマップを「見たことがある」と回答した児童が16%増えた。児童が毎日通る階段の踊り場に防災掲示コーナーを作ったり、高学年で防災対策コーディネーターによる出前授業を行ったりしたことによって、自分の住んでいる地域を知ろうとハザードマップに関心を持ったのではないかと考える。

3 地域で行われている防災イベントに参加したことはありますか。



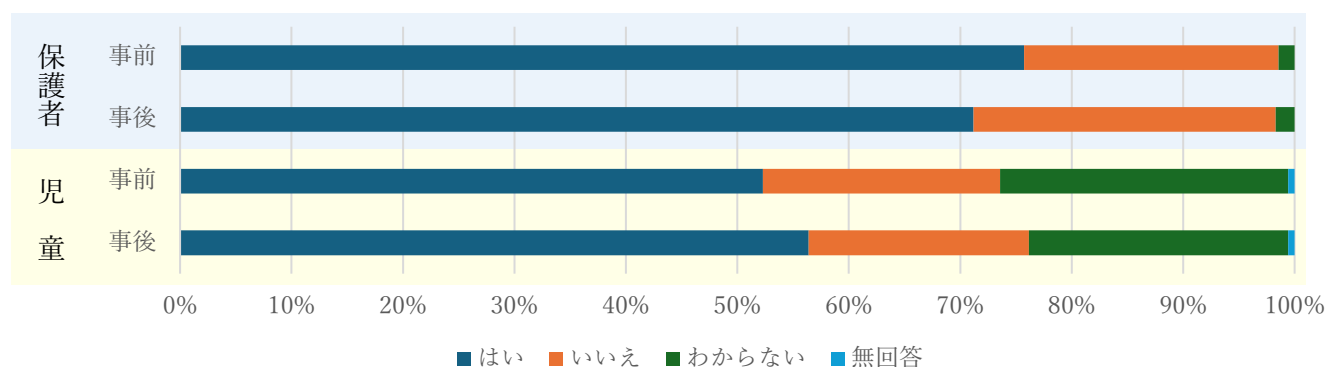
- ・児童、保護者ともに肯定的な回答が増加した。西小フェスティバル with 防災を行ったことで、保護者にとっても地域の方とつながるきっかけとなり、防災イベントに参加してみようという意欲が高まったのではないかと考える。

4 地域の方と災害について話し合う機会がありましたか。



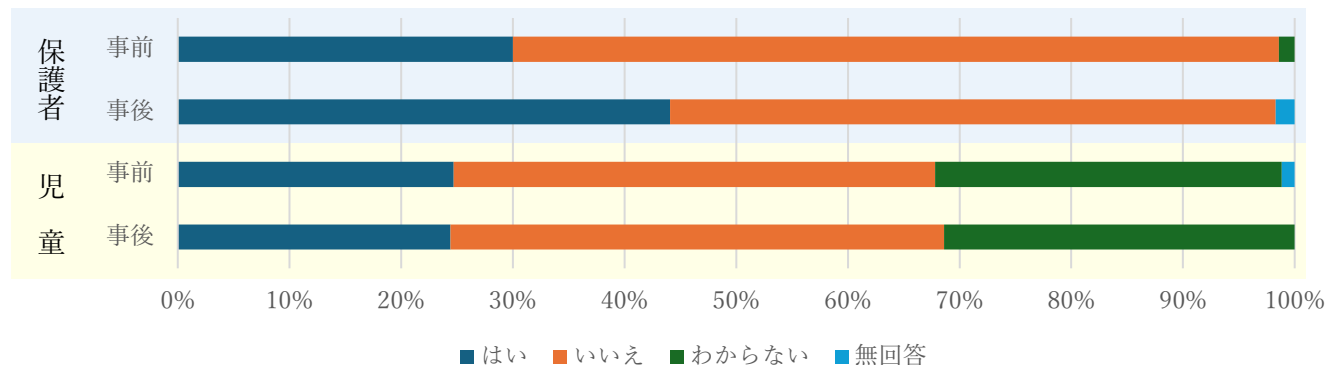
- ・児童、保護者ともに肯定的な回答が増加したものの、期待していたよりも増加の幅が少なかった。そもそも地域の方と関わる機会が減少しているということも考えられる。学校と地域の方で連携した教育活動の機会を今後も確保し、地域コミュニティの拡大を図っていく必要があると考える。

5 あなたの家では、災害に備えて、水・食料、医薬品などを蓄えていますか。



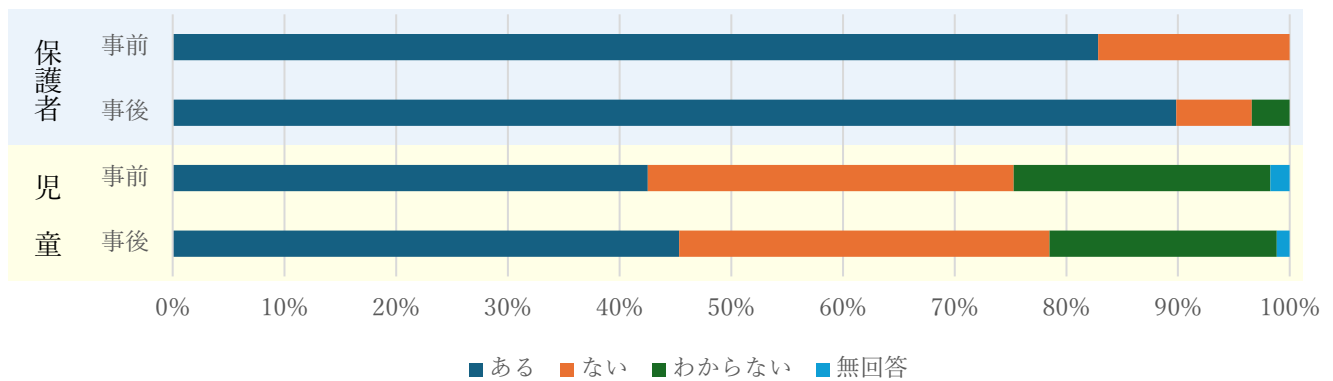
- ・保護者の「蓄えている」と回答した割合が減っているが、もしかしたら、備蓄品を改めて確認してみたら現在の備えでは不十分であると考えたという可能性も考えられる。児童の回答においては「わからない」と回答した割合が減り、「蓄えている」と回答した割合が増えている。親子で備蓄品の確認を行った結果、このような数値になったのではと考える。

6 あなたの家では、タンス、棚、冷蔵庫などの物が倒れないための対策をしていますか。



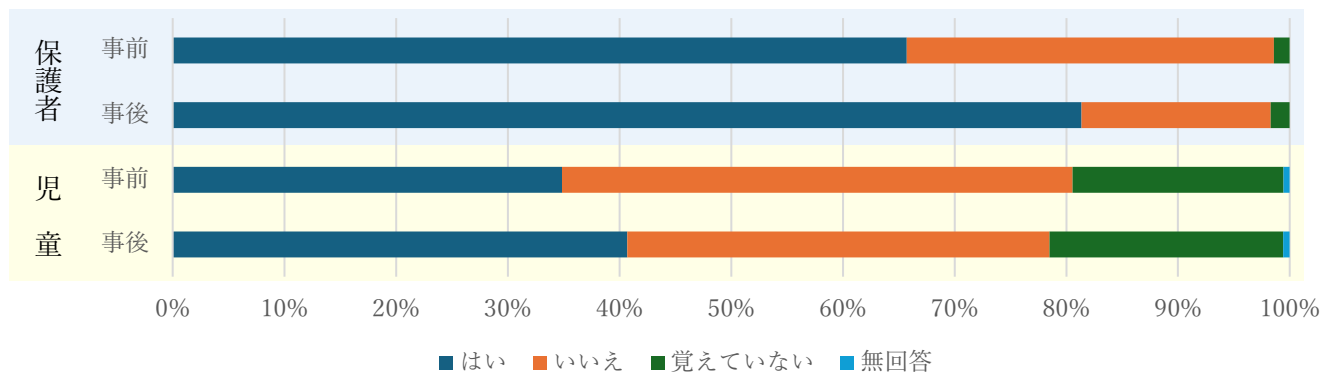
- ・保護者の肯定的な回答の上昇がみられた。おそらく、起震車体験に保護者も参加したことで、地震に対する備えの重要性を感じたからだと考える。また、全児童が起震車体験をしたので、家庭に帰ってから話をすることによって意識が向上しているのではないかと考える。

7 家の人と災害について話し合ったことはありますか。



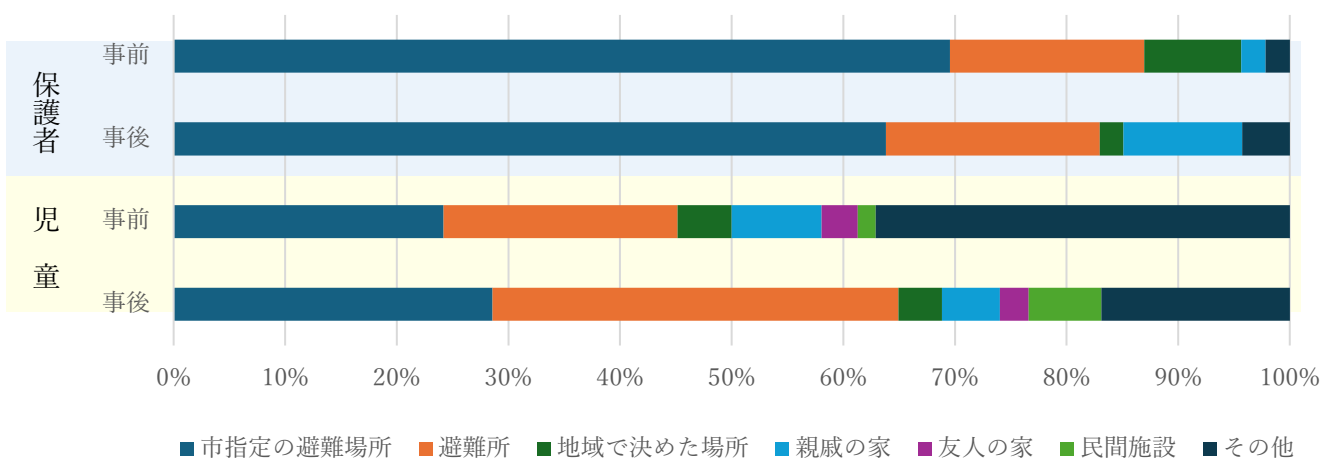
- ・児童、保護者ともに肯定的な回答が増加したものの、期待していたよりも増加の幅が少なかった。
「学校の避難訓練や災害について学習したことを、家の人に話したことはありますか。」の質問では顕著な向上がみられているので、今後も啓発を続けていきたい。

8 あなたの家が災害によって危険な場合、どこに避難するかを家の人と話し合っていますか。



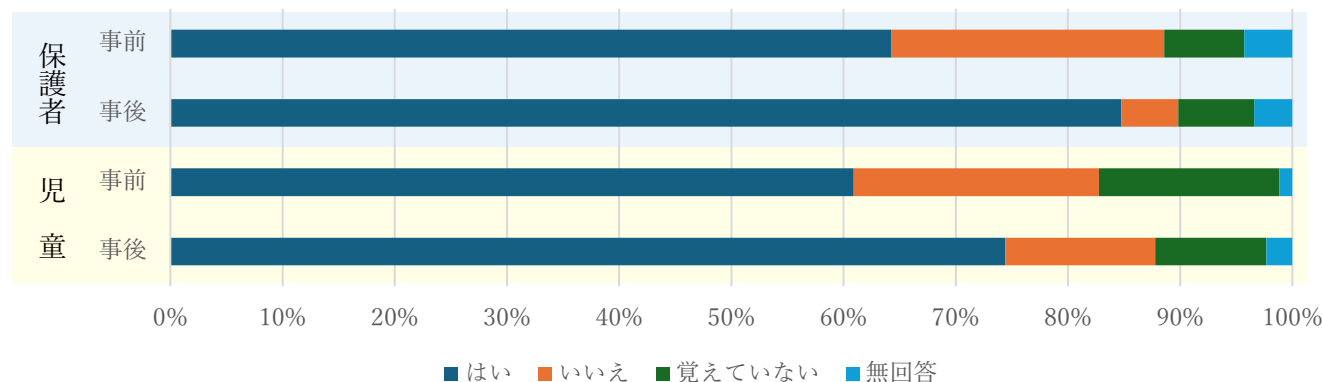
- ・児童、保護者ともに肯定的な回答が増加している。

9 8ではいと答えた方、避難する場所はどこですか。



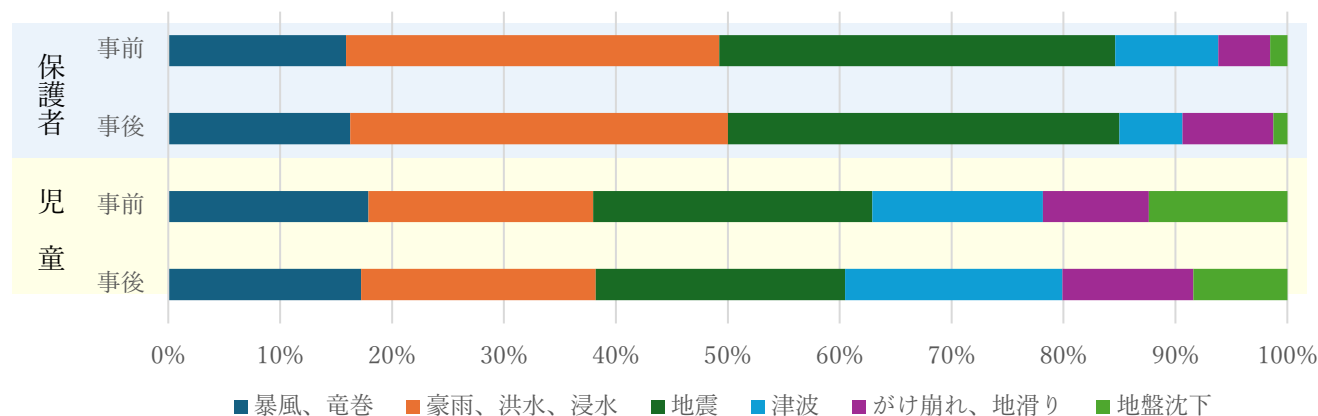
- ・7月の児童の回答では「その他」に分類される避難場所の割合が高かった。しかし12月の回答では、「その他」が減り、避難所と回答する割合が高くなった。今まで曖昧だった避難場所が家族で話し合ったことで以前より明確になったのではないかと考える。

10 学校の避難訓練や災害について学習したことを、家の人に話したことはありますか。



- ・保護者、児童ともに肯定的な回答が大きく増加している。学校での防災に関する授業や行事を通して、家庭内で災害に関して話し合うきっかけになっていると考える。

11 学校で、どのような災害について学ぶ必要があると思いますか。



- ・保護者、児童ともに数値に大きな変化はないが、どの災害に対しても日頃からの備えが大切であったり、油断してはいけないことであったりするなどの意識の高まりは、他の質問項目からうかがえる。

《全体を通して》

- 本研究を通じ、学校が主体となって、家庭、地域とともに防災に関して学んだり、話し合ったりする機会や場を設定した。このことは児童や保護者にとって、災害や防災に対する関心を高め、意識を向上させる一助となるなど、一定の成果が見られた。
- ▲ 本研究が開始されてから、まだ1年も経過していない。意識調査の数値に肯定的な向上はみられるが、劇的な変化まではみられていない。児童生徒、保護者、地域に防災意識が浸透し、地域全体が真に災害に強い町となるためには取組を継続できるかが重要である。今後、継続して行っていくための指導計画の作成や学校支援体制の構築が必要だと考える。

以上の意識調査の結果から、児童が授業を通して身に付けた知識・技能、考え方を学校内で終わりにせず、家庭内でも話し合ったり実践したりするなど、行動化につながった面が見られている。ただ、学校のみ取組ではなく、家庭・地域の方が中心となった取組が必要であり、今後重要になってくると考える。